

研究分野のキーワード: 古典文学、江戸時代、井原西鶴、国語教育

研究紹介

井原西鶴—この名前をご存知でしょうか。あなたが持っている国語(古文)教科書のどこかに掲載されている確率が高いのですが、残念ながら、授業ではなかなか扱ってもらえません。しかし彼の作品こそ、現代にいたるまでの多くの読者を魅了してやまない、「古典」らしくない古典文学なのです。

元禄時代、大阪で活躍した町人作家、西鶴。彼は話し上手であったと思われます。黒田侯(福岡藩主)が、大坂の屋敷へ西鶴を招いてその話を楽しんだという話が記録されており、また、芳賀一晶という人が描いた西鶴の肖像画は、落語家のようにだれかに話を披露している姿に見えます。

話し上手は聞き上手。俳人でもあつた西鶴は、一昼夜に三万四千五百句もの連句を一人で作りました。ほんの数秒間隔で句を読み続けたことになる西鶴の頭脳には無数の話の蓄積があつたはず。その種があつてこそ、つまり、かなりの聞き上手であつたからこそ、西鶴の創作力は発揮されたものと思われる。

愛情、金銭欲、プライド、義理—西鶴の作品には、人間というものの不可思議な姿が鋭く描かれています。彼は「人はばけもの」とその異常さに注目する一方、「人ほど可愛いものはない」と人間臭さに愛着も抱いていました。

そんな西鶴の短編を集め、とびきり読みやすい現代語訳つきの本を、私は仲間の研究者とともに作りました。それが、西鶴研究会編『西鶴が語る江戸のミステリー』『西鶴が語る江戸のラブストーリー』『西鶴が語る江戸のダークサイド』(いずれもペリかん社刊)です。

さあ、古文の勉強などと身構えずに、ぜひ一度読んでみてください。きっと西鶴ワールドに魅了されるはずです。